

脳科学の視点で読む ドストエフスキイとポリフォニー

虫明 元*

ドストエフスキイは生涯てんかんを患い苦しんでいた。一方では彼の作品の中には、てんかんを持った登場人物や、てんかん発作自体が話の中で重要な鍵を握っていることが知られている。脳科学的に彼の病気や作品のことを解釈しつつ、さらに踏み込んでバフチンの提唱するドストエフスキイ作品が持つポリフォニーの構造を検討する。対話や物語の重層的な構造としてのポリフォニーに脳科学的現代的な意義を見出すことができる。

KEY WORDS ドストエフスキイ, てんかん, バフチン, ポリフォニー, 神経科学

はじめに

今回ここで取り上げるショードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキイ（Фёдор Михайлович Достоевский；1821-1881）はあらためて言うまでもなく19世紀後半のロシアを代表する文豪であり、2021年は彼の生誕200年に当たる。代表作には『地下室の手記』『罪と罰』『白痴』『悪霊』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』などがある¹⁾。これらの作品は19世紀を時代背景としながらも、登場人物たちの織り成す対話から読みとれる人間心理の描写が現代にも通じるアリティを持つことで、没後130年を経たいまでも世界中で多くの読者を魅了している。本論では、I. てんかんとドストエフスキイ、II. 側頭葉てんかんの症候群としてのゲシュウィント症候群、III. ドストエフスキイ作品のポリフォニー説、そして、IV. 脳機能のポリフォニー的解釈について解説を試みる。

I. てんかんとドストエフスキイ

ドストエフスキイはてんかんの病気で生涯苦しんだことで知られているが、その病気と作品との関係も興

味深い。妻のアンナによるドストエフスキイの回想記²⁾には、発作が早朝の睡眠中に多く起こることや、発作後の失語、相貌失認とも思われる興味深い症状が散見される。作品とドストエフスキイの生涯に関しては詳細な研究も多数ある³⁾が、ドストエフスキイのてんかんの種類や、あるいは、そもそも罹患していたか否かに関しては諸説ある⁴⁻¹²⁾。例えばフロイト（Sigmund Freud；1856-1939）は『ドストエフスキイと父親殺し』の中で、彼の病気はてんかんでなくヒステリーだとする説を唱えたが、現在この説は否定されている⁴⁾。

てんかん発作の1つに脳の側頭葉に異常を起こす側頭葉てんかんがあり、これにはさまざまな前駆症状が現れるという特徴がある。ドストエフスキイの小説に見られる恍惚前兆は、側頭葉てんかん発作直前に見られる前駆症状とも考えられる。『白痴』の中には、このてんかんの前兆と見られるような場面がある。ドストエフスキイ自身もこれに似た恍惚発作を経験したと語っている。ただこの恍惚発作がドストエフスキイの創作か否かで意見が分かれている。というのは恍惚状態、すなわち、快感を呼び起こすような前兆発作は実際には稀で、多くの前兆発作は不快感を伴うことがほとんどだからである。

東北大学大学院医学系研究科生体システム生理学（〒980-8575 宮城県仙台市青葉区星陵町2-1）

*[連絡先] hmushiak@med.tohoku.ac.jp

一方でドストエフスキイが全身性発作を起こしているという記録も数多く残っており、そうなると、これは側頭葉てんかんから二次性の全般発作となる複雑部分発作である可能性がある。ドストエフスキイの発作は全般性に広がっていたことも推測され、実際には部分発作、全般発作の両観点でさまざまな研究が報告されている⁵⁻⁷⁾。またドストエフスキイの家族にはてんかん発作で死亡している人もいて、遺伝性の素因も関与している可能性が指摘されている。このように、現在では、ドストエフスキイが側頭葉てんかんを持っていたことについては、多くの研究が一致するところである⁸⁻¹¹⁾。

II. ゲシュウィント症候群と性格

ドストエフスキイで注目を浴びることになった側頭葉てんかんについてもさまざまな研究がなされている。ゲシュウィント (Norman Geschwind; 1926-1984) は、側頭葉てんかんの一部の人々に見られる行動、思考、性格の特徴を分類し、それを症候群として発表した。そのため側頭葉てんかんに見られる性格特徴的な症候群をゲシュウィント症候群と呼ぶこともある¹²⁾。側頭葉てんかんは、慢性的で軽度の発作間欠期（発作の間）の性格の変化を引き起こし、時間の経過とともにその特徴が強まり、表現型として5つの主要な特徴を示すことが多い。すなわち①ハイパーグラフィア、②スピリチュアリティ、③セクシュアリティ、④迂遠性、⑤精神生活の激化の5つである。必ずしもそれぞれの項目は疾患特異的でない面もあるが、ドストエフスキイとの関連では興味深い点がある。

ハイパーグラフィアは、強迫的な書込みや描画への強いこだわりである。その視点でドストエフスキイの作品や残された手記を見ると、登場人物のセリフで延々と1人が語り、その中にさらに対話が挿入されているようなナラティブの長い場合があり、このような傾向もハイパーグラフィアと関係があるかもしれない。またこれらの手記にも詳細な図や文章がぎっしり書かれており、これをハイパーグラフィアの表れとも解釈できる。

スピリチュアリティは、通常は激しい宗教的感情および哲学的関心を指し、これは前兆を経験する部分でてんかん患者と関連する症状であると考えられる。いくつかの前兆には恍惚とした経験が含まれて、これは『白痴』の主人公のてんかん発作に詳しく描写されている。実際この主人公は宗教的であり、その宗教的感情はあ

る種の超越的な信念に動機付けられているように思われる。また別な観点からは、宗教的儀式の中でシャーマンが憑依されたトランス状態になるような感覚と結び付いているのかもしれない。

セクシュアリティに関して言えば、ゲシュウィント症候群の人々は、非定型または性的指向の変化の割合が高いとされ、不感症や異常性欲の症例が報告されている。セクシュアリティに限らず、辺縁系の障害によって、本能的行動や動機付けのレベルで異常を引き起こすことが、依存症な行動、強迫的な行動をもたらすこともあり得るだろう。ドストエフスキイに関しても、異常性欲、賭博欲などは記録に見られるところである。また作品の中の登場人物に暴力、人殺しなどの傾向があるのはこの種の影響かもしれない。

迂遠性の性格では同時に粘着気質も伴い、結果として思考目標は見失わないものの、1つのことに執着する傾向があるため、糸余曲折を経て遠回りしながら、目的を達成しようとするが、しばしば結論に至ることができない。ドストエフスキイの作品では、登場人物の発言が数ページにわたることも少なくなく、この粘着質な性格が登場人物に投影されているとも言えるのではないかと思われる。

精神生活の激化とは、認知的および感情的な反応の深化を含む精神生活が強化されることであり、ある種の内言や内省的な思考活動さらに感情反応が激しく変動する過程と考えられる。この傾向は、ハイパーグラフィアとともに、ドストエフスキイの多作の創造的な成果と、登場人物にしばしば見られる激しく、対立的な思考や対話に認められる。このような内省の過剰によって、結果として外界への自然な関与、対人関係の形成や維持ができなくなっていたのではなかろうか。結果として孤独化や内的葛藤を生むことは、ドストエフスキイ自身の孤独感、作品登場人物の孤独感にも表れているように思われる。

III. バフチンによるドストエフスキイ作品のポリフォニー的解釈

これまでてんかんという観点からドストエフスキイの作品を考察してきたが、作品全体に共通する特徴としては、作品の多くが対話によって構成されていることが挙げられる。ミハイル・ミハイロヴィチ・バフチン (Михаил Михайлович Бахти́н; 1895-1975) はこれをポリフォニーという考え方で表している。バフチンは、ロシアの哲学者、思想家、文芸批評家、記号論者であり、

対話理論・ポリフォニー論の創始者である。その代表作『ドストエフスキイの詩学』¹³⁾において、ドストエフスキイの作品の特徴は、人物相互の「対話」にこそあり、その劇的な対話性において多次元的・多視点的な表現が可能になっていることが重要であるとした。ここではバフチンが述べたドストエフスキイ作品の3つの特徴である①ポリフォニーとしての対話、②ヘテログロシアと呼ぶ社会的立場の異なる人々の声、③対話の成り立つ場としての非日常性のカーニバルという考え方について解説する。

ポリフォニーとは作品の中の対話を介した多数の声とも考えられるが、作品の中に小さな物語が多数あり、それぞれが共鳴し合うようなイメージとしても捉えられる。例えば『白痴』では、主人公ムイシュキン伯爵が、エパンチン家の邸宅を訪れたときに、彼の経験した死刑囚の話が語られる。また、マリイという村八分のような状態の娘を共感的に助ける話、イッポリートという肺病に冒された人物が死期の迫る中で独自のニヒリズムの考えを披露する話など、それぞれの登場人物に関連して、派生的にさまざまな物語が語られる。物語はムイシュキン伯爵とナスター・シャ、アグラーヤ、そしてロゴージンの関係性をめぐって悲劇へと展開し、それは『白痴』の4部構成の中で1部と4部に最も動きがあるが、2部と3部ではヒロインのナスター・シャはほとんど登場しない。それどころかイッポリートの長い告白的朗読や、ヨハネの黙示録に関する話、貧しい騎士の話など、多くの物語が主人公やナスター・シャなどの表の話を裏から支える影の話ではあるが重要なエピソードを象徴的に表している。

筆者は即興再現劇を学んでいるが、その創設者であるジョナサン・フォックスは、1つの会場で即興で演じられた多数の物語の間に、深層でつながれた糸のようなものがあるとし、それを“narrative reticulation”と呼んでいる。即興再現劇を日本語で紹介した宗像佳代の書籍¹⁴⁾では、それが「織りなす綾」と訳されている。この表現はドストエフスキイの作品の中にある多重で多層な物語の間の関係をよく言い表している。ドストエフスキイは、小説で何かの主題をモノローグ的にどんどん展開するのではなく、多数の登場人物が主題となる物語を演じながら、さらに関連したり対立したりする物語を語ることで、物語間の「織りなす綾」を生み出し、それが作品全体をポリフォニーとして構成しているように思われる。

ヘテログロシアは、立場の違う人々の対立する声の対話であり、このような多声性のことである。『罪と

罰』であれば、ラスコーリニコフに対するスヴィドリガイロフ、ポルフィーリイ、マルメラードフの存在によって、ラスコーリニコフと社会的立場が異なる人々は言葉遣いが異なり、その結果として、ある1つの仕方で語るラスコーリニコフ自身の特徴を、対比的によく表してくれる。『白痴』であればムイシュキン伯爵に対して、ロゴージン、イッポリート、ガーニヤが、立場の異なる対話をすることでムイシュキン伯爵の人物の特徴を人々の対人関係の中から浮き彫りにするのである。『カラマーゾフの兄弟』であればアリョーシャに対する、ドミートリイ、イワンという兄弟、そして高僧ゾシマ、少年コーリヤとの対話の中で、アリョーシャの人物像が明らかになる。つまり、1人の人物像は、社会的な異なりを対比する声、ヘテログロシアをとおして、解明されるのである。

バフチンは対話の起こる場面としてのカーニバルの意義についても触れている。カーニバルとはある種の非日常であり、それゆえに対話が活発化するような状況と考えられる。その結果、同一の次元で対話になることがないはずの、異なる社会階級に属する人々の声によって、対等な対話が行われている場が描かれる。殺人事件というのは極めて非日常性の高い出来事であるが、『罪と罰』の殺人事件、『カラマーゾフの兄弟』での父親殺し、それぞれの大きな事件によって、物語の日常が非日常へと展開する。そこでさまざまな人々の声が交錯し、対話が活発化するのである。その点でドストエフスキイ作品には日常と非日常を行き来する仕掛けが多数施されている、と言えるであろう。

IV. 脳機能のポリフォニー的解釈

バフチンの言うポリフォニーの考えは、脳科学的にも大変示唆的である。筆者は『前頭葉のしくみ』¹⁵⁾という書籍で、最近の脳科学の成果に基づいて前頭葉を構成する多様なネットワーク群の働きについて解説した。また『学ぶ脳』¹⁶⁾という書籍の最後では、即興演劇に見られる、指揮者や指示者がいないのに創発される芸術と脳の共通性に関して述べた。脳にある多数の機能的なネットワークはそれぞれがさらに複数の状態を呈していると考えられることから、これをポリフォニー的と解釈できるのではないかと考えた。実際に『前頭葉のしくみ』の表紙の絵の楽譜、楽器、指揮棒はそんなポリフォニーのイメージをイラストレーターの古山拓氏に絵にしていただいたものであった。

脳の回路は決して全体が一度に活性化したり休んだ

りすることではなく、常にその活動はゆらいでいる。前頭葉から頭頂葉にかけて内側と外側が安静時の活動で交互に活動を切り替えたり、前頭前野と後方の運動野の間で機能的に切り替わったり、左右の脳は脳梁で結ばれながら連携しつつも多くの抑制的・牽制的関係をもつていて、それでいて、他方へ影響を及ぼしている。そのような脳の中の動的な切替りは「対話的」な関係であるとも言えるのではなかろうか。

また、同じネットワークには複数の状態が共存し得る。視覚の錯視現象で、図と地が入れ替わって、「おばあさん」に見えたり、「若い娘」に見えたりする图形のゲシュタルト現象があるが、脳の中でもこれと似たような現象が起こっているのではないだろうか。脳のような複雑なネットワークであれば、状態は「おばあさん」と「若い娘」の2つだけでなく多数の状態が共存したり切り替わったりする。心理的にも、ひとはしばしば対立する気持ちに悩んだりする。これは本人が言語化しなくても複数の思いを同時に「あれかこれか」として悩む脳の状態を表していると理解できる。ポリフォニーとは不協和音にも共鳴する和音、さらには対位的な関係にもなり得るのである。その点で、基本的にはドストエフスキイ作品が（比喩的ではあるものの）多数の声から構成されているように、脳の働きも、対話的な存在、つまり、多数の対立的な声から成り立っていると考えられるのではなかろうか。そして、どの声を優位に語るかで、その脳の主である人物が著者として構築される、とみなすこともできるのである。

おわりに

ここまで考察を進めてきて、ドストエフスキイとい

文献

- 1) Notes from underground (1864). Crime and punishment (1866). The idiot (1869). The brothers Karamazov (1880). Fyodor Dostoyevsky: The Complete Novels (Centaur Classics), Kindle edition. 2016
- 2) Dostoevsky A (Author), Stillman B (Translator), Muchnic H (Introduction): Dostoevsky: Reminiscences. Liveright Publishing Company, New York, 1977
- 3) Frank J: Dostoevsky: The Seeds of Revolt, 1821–1849. Princeton University Press, Princeton, 1976
- 4) Freud S: "Dostoevsky and parricide". Welles R (ed): Dostoevsky: A Collection of Critical Essays. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, 1962, pp98–111
- 5) Rossetti AO: Dostoevsky's epilepsy: generalized or focal? Epilepsy Behav 8: 446–447, 2006
- 6) Gastaut H: Fyodor Mikhailovich Dostoevsky's involuntary contribution to the symptomatology and prognosis of epilepsy. Epilepsia 19: 186–201, 1978
- 7) Hughes JR: The idiosyncratic aspects of the epilepsy of Fyodor Dostoevsky. Epilepsy Behav 7: 531–538, 2005
- 8) Seneviratne U: Fyodor Dostoevsky and his falling sickness: a critical analysis of seizure semiology. Epilepsy Behav 18: 424–430, 2010
- 9) Picard F, Craig AD: Ecstatic epileptic seizures: a potential window on the neural basis for human self-awareness. Epilepsy Behav 16: 539–546, 2009

う作家は、あらためて脳科学的に大変興味深い作家であると思う。作家の持つてんかんの症状、バフチンのドストエフスキイのポリフォニー的解釈は脳科学的に吟味してみるとさらに深い理解ができる。てんかんという病気も脳のポリフォニーが全体の同期化によりモノフォニーとなり、さらに退化して、モノトーンな発作的振動現象へとなる病態とみなせるのではないだろうか。ポリフォニーとは脳の多様な状態を表現するよい名称と思われる。ドストエフスキイの作品が重層的、多声的なナラティブの構造を持ち、全体を「織りなす綾」としてポリフォニーを構成しているのは、彼の病気のてんかん発作というモノトーン状態とは真逆の状態とも捉えられる。

ドストエフスキイがポリフォニーとモノトーンの両極端の脳状態を行ったり来たりする中で、多くの作品を生み出したことは驚異的である。どうやってこれらの豊富な声を作品として結実できたのであろう。これは単てんかん気質的なものによるというよりは、むしろドストエフスキイ自身が、その疾患も含めてさまざまな極限状態を経験し内在化したことによるのではないだろうか。死刑の判決で死の淵まで追いやられた極限の経験、シベリアの流刑、ギャンブルに溺れたり、生活苦を抱えたりしながら、多くの人に出会い、聞いた声、観察したイメージが、ドストエフスキイの小説の背景にあるリアリティであり、それゆえにいまなお古典として読み続けられているのではなかろうか。ドストエフスキイ生誕200年の今年、あらためてドストエフスキイの作品を読み直すとき、彼の作品は脳の働きに関して極めて示唆的であり、そこに私は現代的な意味を強く感じる所以である。

- 10) Cirignotta F, Todesco CV, Lugaresi E: Temporal lobe epilepsy with ecstatic seizures (so-called Dostoevsky epilepsy). *Epilepsia* **21**: 705-710, 1980
- 11) Rayport SMF, Rayport M, Schell CA: Dostoevsky's epilepsy: a new approach to retrospective diagnosis. *Epilepsy Behav* **22**: 557-570, 2011
- 12) Devinsky J, Schachter S: Norman Geschwind's contribution to the understanding of behavioral changes in temporal lobe epilepsy: the February 1974 lecture. *Epilepsy Behav* **15**: 417-424, 2009
- 13) ミハイル・パフキン（著），望月哲男，鈴木淳一（訳）：ドストエフスキイの詩学。筑摩書房，東京，1995
- 14) 宗像佳代：プレイバックシアター入門——脚本のない即興劇。明石書店，東京，2006
- 15) 虫明 元（著），市川真澄（編）：前頭葉のしくみ——からだ・心・社会をつなぐネットワーク。共立出版，東京，2019
- 16) 虫明 元：学ぶ脳——ほんやりにこそ意味がある。岩波書店，東京，2018

BRAIN and NERVE 73 (12): 1357-1361, 2021 Topics

Title

Reading Dostoevsky and Polyphony from the Neuroscience Perspective

Author

Hajime Mushiake

Department of Physiology, Tohoku University School of Medicine, 2-1 Seiryomachi, Aoba-Ku, Sendai, Miyagi 980-8575, Japan

Abstract

Dostoevsky suffered from epilepsy all his life. It is known that the characters with epilepsy and the epileptic seizure held an important key in his story. While interpreting his illness and works from a neuroscience perspective, this short essay goes further and examines the structure of polyphony advocated by Bakhtin about Dostoevsky's works. Neuroscientific significance could be found in the polyphonic structure of his work consisting of the multi-layered structure of dialogue and narrative.

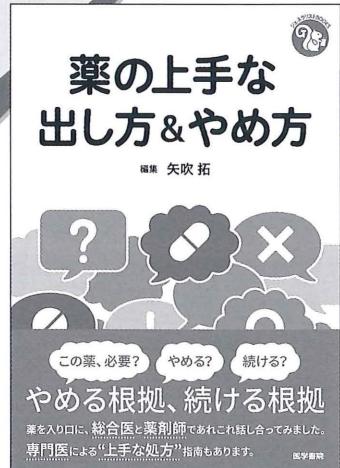
Key words: Dostoevsky; epilepsy; Bakhtin; polyphony; neuroscience

やめる根拠と続ける根拠、薬を取り口に語り合います。専門医による上手な処方指南も！

《ジェネラリストBOOKS》

薬の上手な 出し方＆やめ方

編集 矢吹 拓



なんとなく出し続けていたこの薬、他科でもらっているあの薬、必要？やめる？ 続ける？ 薬を取り口に、総合医と薬剤師であれこれ話し合ってみました。「やめる根拠」と「続ける根拠」、「上手な処方」や「減薬」のヒント、そして薬の話にとどまらず「診療のコツ」がそこここに。専門医による「上手な処方指南」もあります。答えは1つではない。正しい答えがあるとも限らない。けれど、考え続ける先に道はある。

●A5 頁322 2020年 定価:4,400円(本体4,000円+税10%) [ISBN978-4-260-03959-8]



医学書院

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 [WEBサイト]<https://www.igaku-shoin.co.jp>
[販売・PR部]TEL:03-3817-5650 FAX:03-3815-7804 E-mail:sd@igaku-shoin.co.jp